

拜呈

海岸線

2

三	吉	松	石	大	島	高	三	熊	猪
野	野	村	川	浦	田	瀬	野	狩	
混	せ	武	弘	四	春	勝	混	十	満
沌	い	清	夫	郎	夫	男	沌	藏	直

讀	エ	石	寒	詩	○	凌	冬	苺	失	歸
む	セー	塞	明け	十		漂			題	郷
	ニン	前後	篇			船				
	詩集を									
(評論)		(童話)	(短歌)	(詩)	(詩)	(詩)	(詩)	(詩)	(詩)	(詩)

二 月 號



號月二

線岸海

—〔書著者筆執線岸海〕—

- 高瀬勝男 詩集『赤の痕跡』第一 昭和二年二月路傍詩社刊 價二〇錢
三野混沌 詩集『百姓』昭和二年三月 土社刊 價二〇錢
三野混沌 詩集『回鑿者』昭和二年四月 フラ社刊 價二〇錢
河田正樹 口語歌集『直線の街』昭和三年三月 光と影社刊 非賣
草野心平 詩集『第百階級』昭和三年十一月 フラ社刊 價一圓
猪狩滿直 詩集『移住民』昭和四年八月 フラ社刊 價七〇錢
雄野 勇 詩集『顔と樹』昭和四年十月 北方詩社刊 價五〇錢
高瀬勝男 詩集『赤の痕跡』第二 昭和五年四月 ラッパ社刊 價三〇錢
河田正樹 口語歌集『寶樹』昭和五年六月 郷土社刊 非賣

THE STORE OF TO-DAY AND TO-MORROW

新刊圖書雜誌

角忠 佐々木商店

平町松ヶ岡公園前
電話二三三番

平町・田町

佛蘭西
料理
イワキ・サロン

電話三五二番

歸郷 (1)

僕の背後には三千六百キロの鐵路があつた
平野・ガード・トンネル・雪の峠・海峡・山岳
の渦
眠り、食ひ、歌ふ子供らを守り
何年ぶりに古郷の驛の名を聞いたのであるが
しかし、僕は宇頂天では汽車から下る事が出来
なかつた
とりかこむ兄弟達と友人の握手に
わづかばかり顔をほてらした
さて、ここには靴を埋める雪はないにしても
どんよりした空の下では
空つ風がざわめいてゐた
歩きたびごとに背中では亡き妻の骨がゴッ、ゴッ
と鳴つた

歸郷 (2)

死んだやうな村
荒れ果てた畑
雨もる吾が家
そして、そこには酒の呑みたいオヤヂが頑張つ
てゐた
まだ名もよく知らない小ちやな妹達もまた
ゐた
足袋や下衣のない、そして病氣と失業の弟達が
ゐた
繼母の足のアカギレ
わいわいと鍋を取りかこむ十五人の家族
僕は何も言へなかつた
只毎日のやうに財布の口がバクバクと開くので
あつた。
僕の財布はすでに僕の所有ではなくなつてゐた

〔猪 狩 満 直〕

失 題

日蔭へ道ヲ曲ツタ
ツララ (ホーラ ウマウマ)
鐵色ノ道ヲ
イタチガ竹藪ニ消エタ

昔、光リノ満タトシタ田ノ岡デ、冬涸レノ小川
ニカケタイタチ箱ヲアケトラ、手ゴタエガア
ツテ、ガタガタ音ガシタツケ

右腕ヲ抜キ ノビタマンマ
抱カレテル子供
ウツ ウウ 風

吾等ハ醫者ヘ行ク
一圓ヲ借リテ

抱ク
強ク

二十六年ヲ距ツ親子

ヤガテ同志ト呼ブ時ノアリヤナシヤ
肉身以外ノダキ合ヒアリヤナシヤ

泣クナ
キマツテル
冬ハシビレル

ホーラ ナ
アツチ
ツンザク ヒヨドリ

〔熊 十 藏〕

苺

苺はみづみづして大きいのがいい
畑から漁り採る小娘達の喜びは格別だ

僕達にはいい示唆となつた
求むるものはそれだつた

また、自由に摘み採ることを僕は教へる

彼等はなれて、熟練してくる、徒らに荒さなく

なる

少し注意さへ與へれば僕達はい

彼等は自分で責任をもつやうに、自然になつて
くる

株を傷めないで、あまりたべないで、實をそ

さないで、そつくり籠に入れて持つて行く

そして生育から收穫までよくのみこむ

苺ばかりでない

なんでも斯うして自由に採り

お互にきをつけ、歡喜に溢れ、生のいいものを

直ちに採るやうにならう

どんな自由な世界がきて需要者は直接畑から生

産物を採ることが出来ても

それだけの熟練をつんでくれなくてはならない

〔三 野 混 沌〕

冬

凍つたどぶ板を渡つて、まるで泥棒猫のやうに
夜が長屋を襲ふと

幾らかの稼ぎを待つ 母子と

隣家には青ふくれた細君がラムプを掃除し始め

る

そのあたりからはいつても

高調子の話聲が起るんだ

不景氣あ、俺達の心を腐らしやがる

三日休んだ昨日半日稼いで、今日はどこにだつ

て仕事なんかありやしねえ

お上じや働らけ のどこに保護もあるもんか

米が安いからいいやうなもの、同んなじだ

それに旦那が云ふ、政府は失業防止具體案とか、

地方産業の振興は、とか

結局ごまかしさ

風が吹くとミツシミツシ家はゆれた

冬はどこにも足場のない監獄の塀で

その色は黒く、ただ夕日がわづかに賑やかだ

活動館に沈む客が

團欒とか 和平であつても

恐ろしくゆがんでゆく生活

賭博と 失業と 喧嘩と 自棄

産業の合理化

失業者救済

彼の長屋幾人もの適存にさへ何とひびく

一組は 親子四人 職業靴職人

一組は 夫婦 元製鐘工

一組は 彼 職業活版職工

一軒は 空家

一組は 親子八人 職業〔男〕行商人

〔女〕伴 内職 大工弟子

冬は斷雲に送られた陰險な焦燥があるんだ

〔高 瀬 勝 男〕

しゅんせつ船

馬鹿な奴さ

浚渫船は

その巨大な鼻を動かして

いつたい何時までその無意味な労働を続けやう

といふのだ

君達はあらゆる努力で河床を穿鑿し泥を掘ひ上

げる

だが いつになつても泥はちつとも減らないぢ

やないか

君達が不斷の労働の下から

新しい潮流は絶えずやつてきて幾萬幾億の泥

を置いてゆく

泥は繁殖する 無數に

たとへ君達幾十幾百のバケットが河床を埋めや

うとも

泥は常に新しい泥を殖やして行く

6

君達はやがて君達の勢力の無意味を知るだらう

さうして君達は減びる

〔島 田 春 夫〕

○

暴風雨の前衛は一粒の雨だ

量を増し、風をくわへ

降りに降つて、

吹きに吹いて、

何ものをもおしながし、

何ものをも吹きとばし、

太陽が再び照つたときに

何ものをも残さなかつた。

あゝ またあがつた

圓筒形の信號

おゝのけ

亦暴風雨が来るぞ

おゝのけ

その信號に

地上！

○

坂の上の家に

五人が眞黒になつてゐた

百姓だと云つて

鍛つかつて働いてた

子供は

ジャガイモを火にくべて

フーフー

吹きながらたべてゐる

どこか土から流れだした

水のにはひがした

——〔舊 作〕——

〔大 浦 弘 四 郎〕

7

詩十篇

冬

プロペラの音がしたと思つて
急いで戸外へ飛び出して見たのだが
何んにも見えない

蒼空の下で――

ペンキ屋が鳥のような恰好をして トタン屋根
を塗つてゐた

火 箸

火箸を弄びながら子供は
「これ箸のようだ」と言ふ
そして

灰を掻き廻してゐたその火箸で
何かお菓子でもはさむように 火を
赤い炭火を一つはさんだ

秋

一と塊りになつて庭の隅に淋しく咲き出したコ
スモソ

貧しいながら私達一家も
同んなじように

この空の下に住んでゐるのだ

月

夕飯を喰べてゐると

月が出たのであらう

庭の松の木が

くつきりと硝子戸に影を
うつしてゐた

飛行機と冬空

飛行機が

霞をひと掴み ばらばらと撒いて行つた

霞

霞はばらばらと――

庭先で炭を切つてゐる私の 肩や手にもあたつ
た

夕 日

夕日がまぶしいので

圭子ちゃん

持つてゐた大きな八つ手の葉で顔をかくした

ビ ラ

街の上で飛行機がビラを撒いた

焼芋を頬張りながら子供は

舞ひ落ちる無数のビラを見てゐた

砂ほこり

夜更けの電車が ひどい砂ほこりを立てて疾走

して過ぎた

私の前を歩いてゐた女は

袂で顔をおさへた

庭

晝飯をすまして 縁側へ出て煙草を吸つてゐる

と 曇つた空からたんぼの毛が一つ 一つ
そりとおちてきた

〔石 川 武 夫〕

寒明け前後

・心邊雜事・

腹這ひてもののひとつをみつめつつ心鋭くるたりわれはも
心鋭くいく日か経つれおのづから疲れ現れねすごこのごろ
ものをこそ思ひば噴りあるらしも心うつろにありたしわれは

・微よ・

頭の重さこらへつつくむ酒にがしかりそめながら日は経たりけり
頬にのみ酔あらはれてわびしけれしゅうねき風邪の療ゆべくもなき
おこたりて今は術なしただにかも頭の重たさに酒をのみるる

・春を覗く・

庭樹はも紅芽ほのぼのとふくらみつ寒明けて降る雨にひかれる

・節分・

寒明くる夜はしみみと酒くみてひとりし酔えばうれしかりけり
遠々に聲はりあげて豆まける聲のみきこゆ静かなるかも

寒明けて雨催う空の灯明りの夜氣なごやかに春たつらしも

〔松村清〕

石 (童話)

吉野せい子

梨の實が皆もぎられて、カラツとしてしまつても、未だ木の下に立つとグリーンといふかほりがします
そんな秋の日の中で、母さんが頑丈な手で梨の木の下に積んである石をセッセと取り除けてゐます。
此石は父さんが若者の時、地の中から掘り出したもの、そして又、すつと大昔の人達が此一つ一つを
何かに使つてその生活を豊かにしてゐたもの、ソラ大昔の匂ひがするだらう。笑つちや駄目、この石
をどう使ふか父さんと母さんは今ほんとに善いことを考へたのだよ。此石を並べてお天道様の光と熱
を呼んで其處に葎を植ゑる。ホラあたたかければ、あのおいしい葎が早くまつ赤に熟すだらう。ねえ
サア和も望もちつちやい浩も一つでもいいから父さんのところへ運んでおあげ。そんな腐れバケツで
は底がぬけるよ。ちやんと兩手でシツカとお運び。オヤ赤ん坊のリー子もおんぶされて手を動かして
ゐるね。ああ、皆んな一緒に力をあはせてヨイトコヨイトコ。幼い姉弟たちは聲を合せて笑へ笑へ。
よろかつたりしながら運びます。母さんも楽しそうに笑ひました。そして母さんの手は前より一層早
く動き出しました。ト、ストン、丸い石が一つ母さんの掌をすべり落ちて、下の石塚の上へボカンと
あたりました。

あはてて、母さんはその石を取り除けた拍子に、まあまあ皆んなきてみな。べたりと地上に座つ
て、叫びました。その聲が梨畑のすみへまで、ツキ通すやうに響いてゆきました。オッド、向ふに
ゐた父さんまで、腰をのばしてこつちを見た位ですもの。黒い洋服をきた細いすねのこほろぎが石に
打たれて死んでしまつたのです。その石からのがれて、小さい蜘蛛が走つてゆきます。蜘蛛の來襲に
驚いた蟻の一群が一匹の鯨、イイエ、生きてゐるみみずを投げ出して、白い卵のドツサリある巢の中

へ逃げこんでゐます。そこで半死半生のみみすが、のたり／＼とそのあふなかつた命をまもるためにはひ出しました。ヤアヤアよりかきり、ややこしいこの事件に就いて姉弟たちのすばらしい相談が始まりました。「こほろぎ一匹死んだもんでと皆んな助かつたんだよ」「んであつたか。うつちやつてたつてどれか一つは死んちまうよ。蜘蛛がこほろぎにくわれつたか。蟻の卵が蜘蛛に食われつたか。みみすが蟻に食はれつたか。ナア」望の眼玉がくるくる廻るね。

「可愛そうだなこほろぎ殺して」

「仕方あつか、まちがつたんだもの」

「母ちや馬鹿だナ」

浩は死んだこほろぎを指でツツツイてゐます。

豫 月 三
告 輯 特

新興映畫の展望 河田正樹

内務省映畫檢閲史 島田春夫

エセーニン詩集を讀む

三 野 混 沌

サヴエートロシヤ國立出版局刊行の「エセーニン選集」尾瀬敬止譯を讀む。これによつてみると第一部に革命前のエセーニンが出てくる、そしていきなり「愛する邦よ！」と歌ひ出す。若い時代の自然に對する憂鬱な感受性を持ち、自分といふものを柔げてゐる、「お前のさわめく緑草の中に私は身を隠したいと思ふ」これはまたロシヤの國民性でもあらう。農民の國であるロシヤの傳統的な大きなかくされて持つたはこりであらう。傳統的も、日本の福士幸次郎の「百姓女の酔つばらひ」の歌のやうに、抒實詩をもつて始まるのでなく、彼に於ては幻覺を主としてゆく、いはゆる幻覺主義派である國民性やそれに圍縁してゐるすべての自然物が極めて簡單な表識によつて著され、つまり自分の感官をとほし理智をとほしやがてかもされたすべつくりの思想が湧き出されるのがそれであらう。「凡てのものを迎へ、凡てのものを執らう、魂をとり出すのは愉快で幸福だ、寧ろそれを棄てるために私はこの地上へ來た」

エセーニンはロシヤ農民の使人のやうに思つた「私のロシヤよ、田園のロシヤよ！」と呼び、「私はお前の歌ひ手で、傳令使で、野蠻的な詩の悲しみもレゼタとミヤータの花から培つた」と。彼はなだらかなそして柔な線をもつて誰よりも若やかに書いた。二十代から三十近いころまで最も盛んな時代だけに、それだけ彼は抒情風に、従つてロシヤの惱みを歌ふた。「おゝはねがやの木むらな國よお前の前にはなだらかさが親はしいが、しかもお前の國には鹽田のやうな憂鬱がいよいよ深い」「牝牛」「犬の歌」等あるが、毫れた牝牛が鼠に仔牛の白い足が噛られてゐるのを見ながら人々がつかないだ輪索の紐で屠殺場へ伴れられる、牝牛は角を地上に押つ立てたといふ。又、或朝七匹の仔犬を一匹

の牝犬が産んだ、牝犬は一日中仔犬を可愛がつてゐた、すると主人がきて仔犬をすつかり袋の中へ入れた、牝犬は雪だまりの中を駆けて追つた、月を仔犬のやうに思つて吠えた、みんながパンをくれるやうにからかつて石をやつた時、牝犬の眼は黄金の星のやうに光つて雪の中へ注いだとたんじた。更らに『私は故郷で』でを讀む、貧乏で家族の多かつたため父は彼を母方の祖父さんの家で養つてもらつた。九つの時から詩を書きはじめたが十六七八の時いろんな雑誌に詩を送つた、載せられないのでペテルブルグへ上京した。そこにはプロツクやゴロツキイ等がゐた。そしてその人達とつきあひ詩人の生涯を始めた。今迄、學問をしたり、野良仕事をしたりしてくらした蕎麥色した曠野のトスカの中で暮すのに疲れて私は草舎を捨て、宿無し者や泥棒になるつもりで家出をしやうといふて出ていつた。そして、それからそれと心配した。「貧しい住家を探して晝間をさ迷ふ、親しい友達がきて威嚇する、草地の上で黄色い道を繕んでゐると私を追つ拂ふ。又父の家に歸つて慰められるが、若い薄暮に窓際で自分の裾で首を吊るだらう、人々は不淨な私を犬の啼くところで葬るだらう、月は湖水にオイルを失つて泳ぐだらうしロシヤもやはり生き、垣根の傍で踊つたり泣いたりするだらう」といふ、さまざまな苦行と真剣さは當時のエセーニンらしかつた、そしてそれは革命前のロシヤの農民の苦惱と實際であり、さらに新しい時代を嚮望するものゝ姿であつた。

次に、詩集の第二部は革命後のもの、第三部には特にサグエート革命を歌つたものとこの詩集の譯者は註してゐる。さらば第二部と第三部の詩は一九一七年から二五年までの作である。第二部に集められた詩を讀む。麗々詩情が滾々と流れ、實に酔ふに近い。「歌よ、歌よ、お前達は何を叫ばうとするのか？ でなければお前達にはもう何んにも與へるものが無いのか？」とまでいつた。一寸と考へるとこれは大きな矛盾だ、なせなら、一九一七年二月ロシヤは革命が勃發してゐる。一九一八年から二〇年にかけて内亂、政治的恐怖、經濟的混亂の時代で「赤」の勝利となるまでにレーニンの十月

革命があり、想像外の飢餓と慘害とに落ちてゐた。この三年間にロシヤの民衆、殊に智識階級は二つに分裂された一は國外に、一は國內に（勞農共和聯邦の同志）止まるを得たのである。然もこの内亂時代の三年間こそロシヤ詩壇が最高潮に達した時であるから、そうして新しい國民詩人マヤコフスキイ。プロツク。アンナマフトワ。セルゲイ・エセーニンのこと等が最も人氣を博してゐたのである。ロシヤにあつては詩人は革命前も革命後も一層優遇されてゐたからである。思ふに一般作家や、詩人達は他の智識階級の人々より苦難の程度が少かつた、ことにモスクワに於て左翼詩人はいたるところで——カフェや食堂やレッキン劇場内やツウオルスカヤ街の詩人カフェ等では新しい活氣の中心になつてゐたといふ。こゝではよく彼等は自作の詩を朗讀し合ひ、よい詩であるとするが評判になる始末。エセーニンも自傳の中でいふてゐるやうに革命當時ロシヤに紙がなかつた時、わたしはクシコフやマリエンゴツフとともに自分の詩をストラスノイ修道院の壁に書きそれを遊園街のどこかでよく朗讀したことがあると。彼等はそのほか國立出版局から著作の金の支拂を充分に受けてゐたから、又、あそこへ行つて飲み、歌ふといふ調子であつたらしい。かうして革命後もながいこと放浪の旅をつづけてゐた。彼はロシヤがかやうに彼の名聲に對して出来るだけの好意をもつてくれたけれど「われわれの詩のもつとも善い崇拜者は賣笑婦と惡漢とだ。われわれは皆彼等と非常に親密だ。共產黨はわれ／＼を疑つて愛さない」といつた。

この秋の月夜に

獨りで草の上をさまよひ

路上の落穂を

貧しい心の合財袋に集めるのはいい

だが平原の緑色は飛び去りはしない

歌よ歌よお前達は 振り落されはしないか

夕べは金光りした吹雪のやうに

私の平らな道は掃き清めた

どうしてもものつびきならないけちな愛憎を、彼は振り落さうとし、ロシア革命後、即、獨裁共産社會と、まだ傳統的に持つてゐた自然的な慾求を持つ民衆社會と相容れないところの誤解とを大きくしたます、この兩階層の溝をひろげた、同時に多くの下層農民達のその生みの子をどうしたら代辯人としてロシアへ送ることが出来るかを考へたのである。

賢い賢い農民らよ、

お前達はたしかに見すばらしくなり、

やはり神と沼の深みを恐れてゐる

お、若しもお前達がその事を解して呉れるなら……

ロシアではお前達の生みの子が

もつとも良き詩人となつてゐる事を

然し、彼はもう急がなかつた、故郷の家を見棄て、空色のロシアを見棄て、永い間吹雪の中で歌はうと決心した。古い楓は片足立てて空色のロシアを守つてゐるやう、室内温度五度といふ冬を越した後、彼は「わたしはエル・カー・パー（ロシア共産黨）に決して加盟しなかつたといふのは自分をさらに左化したものと感じてゐるからである」と、かうきつぱりと言ひ、彼は共産黨よりも自由の新しい種を蒔きつけやうとした種蒔者であつた。

あたらしい種蒔きが

野原を歩いてゐる

そしてあたらしい種子を

畦に投げてゐる……

彼は土地を持つ農夫ではないロシアの農民が持つべくして與へられるその慾望を充分に満すことの出

来る豊穡な生産力を信じ、それからうる新しい農民の社會を持たうとした、そしちまこの土地に農夫達が離れずについてゐるやうに離れずについてゐた。

……お前には太陽を歌はせない

窓のそばで極楽を見させない

風車のやうに翼をはたいて

地上から飛び上がらせることも出来る

と、しつかりと地べたについた、そして動かすことのできないロシアの現實がここに横つてゐる。

綺麗ではないが

いつまでも忘れられぬ道

え、ソリよ 誰のソリなのか

やまならしの木の凍えた葉音

私の父は——百姓だ

そして私は——百姓の子だ

詩の上にこれらの意識を彼は投げ與へ、確信を強めた。モスクワでは私の詩を不評判にいふ、それにも拘らずロシアには他の多くの讀者を自分にもつてゐる、むしろそのために私の詩は存在する、といふやうなことをいふた。彼はマヤコフスキのやうに都會の街上下革命を歌ひ、革命に参加し、その詩をしてプロバガンダの役割をせしめるやうなことはしなかつた。むしろマヤコフスキ等と對立し忘れてゐた田園、亡びゆく田園を救ふかほりに都會をにくんでゐた、しかも革命に際しそれを強く歌つた。彼は酔つぱらつては吹雪の中で河柳や松に歌を歌つてやつたつた、「別な、新しい未知のことを土地と草の上へ空想するな、人間はそれを言葉で心に告げることなく呼ぶすべし知らない」と革命當時から暫くの間ロシアは情熱に燃えてゐた。ブルデョア生活の憎惡への對照としての偶像破

壊と、新しい統治者と結合しやうとする労働者の態度の尊敬、形而上學的な空想や思索から解放し大衆を明快な行動に導かうとした、主として宣傳的なもの、又、戦争後ドイツに發生した表現派（印象派）の向ふを張つて急に生れた）がロシアに這入つてきた。抽象的な概念を具體化した作品。ロシアはかかる難多なる流派をもつ作家又は作品によつて混亂してゐた。エーセニンは新しい現實をもとめ現實に即して考へ、どこまでも書きつづけやうとした。彼は七年か八年目に故郷に歸つた。父の家を見分けることが出来ないほど變つた。日印の楓はもとのやうに窓際で揺れてはゐない。彼は立ち止つた、雑草のほこりを拂ひおとしながら杖に縋つて歩いてゐた老人に家をきいた。「もし／＼貴方、教へて下さいよ、そつちの方にエーセニナ、タチャーナといふ宅は御座いませんか」「タチャーナだ……フーム……それですこの百姓家の向ふぢや。してお前さんは、あの女の何んですかい？ 身内の人でも？ ああひよつとしたら我が家を追ひ出で行つた倅ぢやないかいな？」「さうです倅です。ところでお老人は一體あなたは？ 仰言つて下さい、どうしてさう悲しうにお見詰めなさるのです？」「よう俺の孫ぢや、どうしてお前はお祖父さんを忘れたのぢや！……」かういふて宅に歸りながら、お前はどうか直き三十にならう、俺はもう九十ぢやと、お前はコンムニストなんかぢやあ？ 姉妹どもはコンツモールカになりよつたわい、何んちう事ぢや、死つてしまやがれ！ 彼奴らはきのふ聖像を棚から下ろしよつたと思ふと今度はコミッサールが教會の屋根から十字架を外しよつた。今はどこで神様に御祈りしていいやら、そこで俺はこつそり森へ出掛けるのぢや。おつ母さんとお祖父さんが彼の變り工合にがっかりして沈んでゐる。姉妹たちは「資本論」を披げ、マルクスやエンゲルスを紹介して彼に説き付けやうとした。

五月の新緑の代りには吹雪を

感情の放肆にたいする清算については

愛によつて感情のどよめきを求むべきを私は思ふと告げた。

詩集の第三部。先づ仲間ともいふべきロシア農民詩人で、先輩で、ゴロデツキイに紹介されたクリューエフにむかつて「今日私の愛は昔のやうな愛ではない」といひ「君は心を百姓小屋に捧げたけれど心の中に我が家を築きはしなかつたか」とくらはせた

君が夕べに待つてゐた、その者も以前のやうに

家のそばを素通りして行つた、

お、友よ、誰に君の鍵を預けようとするのか

君は歌詞で鍛錬した人間なのか

とやり込めて、詩人面をしてゐる彼を叩き付けるも同様な言葉を送つた。そして次に彼は悲痛な聲で「野よ、野よ、お前は誰を呼ぶのか？」と叫び、彼を解する誰もゐない、青眼騎兵がライ麦の野を跳躍するのが見え、百姓出のコンツモール（共産党青年同盟）が山から下り來、手風琴をデミヤン、ベツトメイの宣傳歌を滅茶苦茶に鳴らし、楽しうに叫び聲を谷間に響かせてくる。あすこにまた「彼」（都會）が這ひ出してきて月を眺めてゐる。

かやうにして政治的に、都會方面的に田園を侵略していく。詩人達が「不思議なお客」（都會のこと）の歌をうたつてゐる時「詩人よ、若し結婚しようとするなら、家畜小舎の中で羊と結婚せよ。藁と獸毛の聖餐を受けよ。蜜蜂のやうな言葉を歌で暖めよ、邪惡な『十月』（サゲエート革命）は白樺の茶つばい手で指輪をふり撒かう」といきり上つた。彼は権力的革命政府に對し斷然こつち側だといふ、彼自身革命前に思つた革命の行動とはまるで違つたものであつた

私はサゲエート政權を非難する

私の暗れやかな若さな

他の戦ひの中で試めなかつたさいふ
さういふ侮辱を感ずるからだ

こゝではもう仕様がな、彼はどんなに國民と親しくすべきかを詩の中で叫んだかしのない。自分の歌なんか必要がない。その上ひつとすると自分自身もやつぱりこゝでは必要が無くなつたといつた

縫太——姉妹——雄犬——兄弟よ

私はお前達のやうに、人間の壓迫の中にある

私は傍聴者

大鵬の翼が必要ではないのか

さあそこで故郷の隠れ家よ、私を宥せ、お前に盡した事があれば——それで私はもう澤山だ。今は私を歌はせな——私の故郷が惱んでゐた時、その時私は歌つたものだ。と言ひ終つた、それから彼以外の人々のこともかんがへた、人々はおつと不仕合せで、忘れられてゐる。人々は轡の中のぬかのやうに譯の判らない事件の渦中に陥つた。眼は牛よりも哀れげだ。人類の平和な事業の中で池のやうにかねらの血を逆らした。サグエイト實權の下になほこのみじめな生活をしてゐる農民に同情を注いだ。だがまもなくこゝで貧乏な農夫達が「俺達はサグエイト政權と共に生きるのが嬉しい」といふた。これを聞いて彼は

何とこれらの言葉の凄惨な事よ

誰が毎日サグエイトとパンを喰つて済ましてゐられるか

なぜ私は毎晩

不運で情けない戯を罵倒するの

誰が世の中を戦争化し

誰が偉大な思想を擁護したか

その事を私は疑ふ

そして自分の若さを殺した私は
思ひ出さへも持ち合せない。

何んといふ侮辱だ

何んといふ大きな侮辱だ

私はふつと生れた人間に過ぎない。

しかし、自分の興へたものでなく

冗談のために私に與へられたものを

評價することが出来る。

愛するギターよ

ひびけひびけ

シアシーの娘よ、私が女の愛嬌も、心安さも知らない、

その毒された目を忘れるやうな

何かの歌を奏でてくれ。

愛するギターよ、ひびけ ひびけ！ と彼は歌ひつゝ、若い者達は何も咎めたくもない、かれらはまだ刈り入れられないライ麦のやうに、それを求めて種子を蒔くべく生れ残つた者だ。

若者たちよ、花咲け、そしてからだを健やかにせよ

諸君には別な生活があり、諸君には別なメロデーがある

私はひとりて知らぬ國境さして行かう

永久に反逆の精神を抑へながら

凡てを擲取しよう

絶對的に凡てのものを歡迎しよう

打ち出された足跡について行くべく準備を終つた、

私の全心を「十月」(サグエイト革命)と五月に返へさう。

NAKANO YOHINTEN

TEL. No.53

高久病院

平町・田町
電話五二三番

院長 高久 忠
副院長 赤羽 清
藥局長 佐竹 菊雄

愛する琴よ、ひびけ ひびけと歌ひつゞけ、何
かの歌を奏でてくれ(自分にだけ音色をゆだね)
こゝのところサヴェート國家を去つて、未知の
國に立たう。帆のやうな黒い翼の大鴉——一九
二五年十二月三十日、彼は男々しく飛び上つた。
虹の中から大の鴉の叫びを上げよ！

——悲しみは人間を酒の中に溺れさせはしないし
沙漠も騒打し

たましひを癒さない事を

つまりはその爲めに

腹引なんか引き裂いて

コムソモールのうしろを追つかけたいと私もさう翼ふ。

x

x

x

後記・奥附

○主として僕の意情からこんなに発行が遅れて申譯ない、
月もひびく追つて二月號を送り出す。

○海岸線社、福島縣平町福宜町廿一番地へ移轉。

○「或る品評會」頒布五錢。いま印刷中だ。續いて三野混沌

詩集「橋道」。石川武大詩集(題未定)と、ドシドシやる
値段もグンと廉いからみんな買つてくれるといい

○頁がないのでこれきり書けない。(島田)

昭和六年二月二十四日印刷納本 (毎月一回発行)
昭和六年二月二十七日發行

【誌代 拾錢】

編輯發行

福島縣平町福宜町廿一

島田 春 夫

印刷

福島縣平町仲町二〇

熊 謙 次 郎

印刷所

福島縣平町仲町二〇

二葉印刷所

福島縣平町福宜町廿一

發行所

海岸線社

貴金
時計
眼鏡

常盤屋時計店

平町一丁目
電話三三九番

平町白銀町

河田鐵工場

電話三二九番

平町新田町

宴席

榮 楽

電話五〇九番

平町仲町

二葉印刷所

電話一〇三番

ただ一本の釘にさへ
露らるる――

カサモノテン

釜

屋
電話九番

讀書人への誠實なるサーヴィス

三階――講演・集會用ホール 完成
一階――直營食堂 開設

マルトモ柴田書店

平町四丁目マルトモビル
電話二三四番